

# 古代から中世にいたる疎垂木の技法

岡 田 英 男

## 一、はじめに

前稿に於いて古代の桁から上の小屋構造について述べた中で、紫香楽から移築されて石山寺食堂にあてられた藤原豊成五丈殿の合掌構造にふれ、さらにこの種の構造を示す遺物として、平城京東堀河出土の桁焼損古材についてもふれた。<sup>①</sup>

この種の構造では、柱上に梁を渡し、梁の上に桁をのせ、又首（垂木）を桁上端の欠込みに引掛けるように架け、又首の拌みに上から棟木をかぶせるように納め、妻にのみ棟束を又首下に立てている。このような桁に垂木を引掛ける欠込みを作る仕事は、この他にも東大寺法華堂入側桁にも見られ、石山寺本堂小屋材にも確認されている。同種の構造は藤原豊成殿のほかにも、同時に法備国師によって石山寺法堂にあてられた三丈殿も同様である。垂木は柱位置のみであったから、この上に太い小舞を並べ、下地を作って板葺としていた。<sup>②</sup>

この種の構造が奈良時代板葺建物の一般的構造であったと推定されることは前稿に述べたが、屋根板は棟から軒先まで全長を一枚板で葺いたらしい。豊成五丈殿の場合、福山敏男博士が復元された天平宝字六年閏十二月二十九日秋期告朔では蘇岐板長さが二丈あり、一〇〇枚が計上されている。少なくとも一面に庇が付いていたと考えられるが、板は少なくとも二重に葺かれ、上から押えをのせていた。三丈殿の場合、同五年十二月二十八日の矢口公吉人屋丈尺勘注解に長さ一八尺の屋根板、幅五寸以上三二枚、棟木長さは三九尺であるので二・三枚重ねであったらしい。当然、継目をずらして雨もりを防いでいたはずであるが、五丈殿では蘇岐板と記す。平安時代の化粧裏板では板幅一ぱいに杢目が横に通っているものがある。縦板張りとしても割れないであろうが、巨材の周囲から杢目に沿って割ったものである。そうすれば、割れに強く、木表を表に使えば、多少反って、雨水の流れも良く、押えをのせた場合も雨水が流れやすいと思われる。古代には巨材が多く繁茂していたと思われるが、材の周囲は杢目に沿って板をとり、

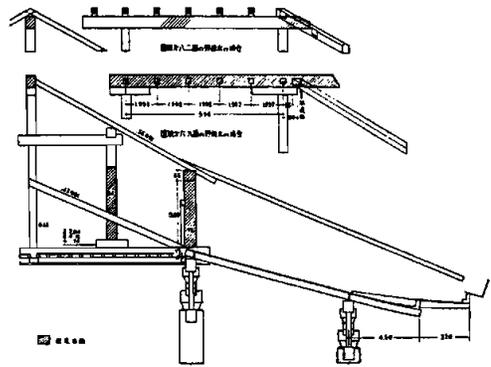
中央部は角材等を取材したのであろう。

奈良時代の古文書にみえる板屋はこのような構造で、その名のよう  
に板葺であったのであろう。板葺はすでに皇極天皇の飛鳥板蓋宮で用  
いられたが、後の木瓦葺のように厚板を用いたものか、薄割板を重ね  
たものか明らかでない。恐らく前期難波宮も瓦が出土していないので  
板葺であろうが、巨大な建物群であったから、屋根板も大量に必要と  
したことは言うまでもない。

### 一、合掌構造の痕跡を残す建物

上記の合掌構造の手法は垂木（合掌）の拌みで棟木を支えるもので  
あるが、このような桁・母屋に欠込みの仕事を残す建物の例をみる。

東大寺法華堂では正堂北側入側桁の三丁継のうち西端の一丁で、長さ  
四・二m、丈二五cm、幅二二cm、上端後角に幅九cm、奥行五cm、高さ九  
cmの欠込み仕口と、上端後角寄りに幅六cm、奥行五cm、深さ三cmの後方  
から斜に彫り込まれた仕口が交互に並び、前角寄りに古い釘穴もある。  
これに繋がる二丁には上端に古い釘穴のみ認められる。前記の材の旧用  
途は垂木受け材と考えられた。上面の彫り込みとその間の後角の欠込み  
は、前者は垂木を継いで合掌風に棟木を支えた垂木彫り、後者は組入天  
井の組子仕口と考えられたが、このような部材は現在の正堂では考えら  
れないので、礼堂からの転用の可能性が指摘されている。<sup>3)</sup>



第一図 石山寺本堂小屋組推定復元図  
(修理工事報告書)

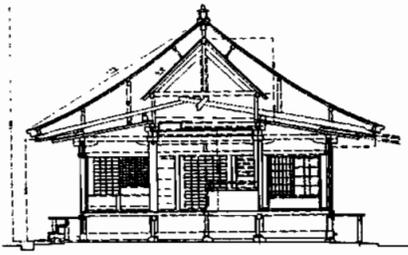
慶長四年（一五九九）淀君の寄進によって再建され、本堂身舎柱に飛  
貫・側柱に腰貫を通すなど大修理が行われている。本堂棟木と考えら  
れる材が谷隅木に転用されていた。転用の際に各面はつられていたが、  
側面に垂木取付きの枘穴、下端に肘木太枘穴（二個一組）が三カ所あ  
り、ほゞ全長を残す。旧母屋桁には一・九三尺割りに上端に斜にほり  
込んだ引掛り仕口があり、これと同時に考えられる野棟木が別にある。  
枘穴のある棟木と引掛りのある母屋桁で上方野垂木を組み、下方野垂  
木はその上に添付けたように考えられた。ただし、棟束に支えられ、母  
屋下端にも角枘穴があつて直接束で支えたもので、垂木のみで棟木を

石山寺本堂は奈良時代天  
平宝字五、六年（七六一・  
二）に桁行五丈、梁間二丈  
の建物を改築して、桁行七  
間、七丈、梁間四間、四丈  
の建物に改築された。この  
本堂が承暦二年（一〇七八）  
焼失し、永長元年（一〇九  
六）十二月再建供養された  
のが現本堂で、焼失以前か  
ら前面に礼堂が建てられて  
いたと考えられる。礼堂は

合掌風に支えたものではない。<sup>4)</sup>

### 三、内屋根の疎垂木板葺構造

平安時代になって化粧と野地が分離され、軒先まで小屋組（野小屋）が出来ると、内陣本尊の上方に、雨もりの際、直接本尊などにかかるのを防ぐために、内屋根が作られるようになる。現存する古い実例として天治元年（一一二四）の中尊寺金色堂がある。天永三年（一一一一）の鶴林寺太子堂にも内屋根があるが、屋根が宝形造であるから、心柱を囲んで四方に勾配急な内屋根が作られている。



第二図 室生寺弥勒堂断面図

中尊寺金色堂では、宝形造の小屋組内に軒先まで入母屋造の内屋根を作る。内陣部に入母屋土居と桁を組み、両妻に又首を組んで棟木を受け、四面化粧裏板上に勾配に枕を数本置いて平二通り、妻三通りの母屋をのせ、又首棹の上に母屋をのせて割板葺とする。屋根板は杉、幅五寸六分、厚さ三寸六分を板目に割ったものを四・五枚重ねに葺く。妻側は全長一枚板

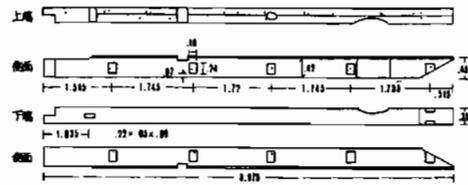
とし、平流れの方は下方は茅負に突付けに並べ、上は棟木に交互にのせるように葺かれている。板は単に置いたものを母屋位置で押縁止めとしていた。この棟木下端に天治元年（一一二四）の墨書銘があるが、押縁までは昭和六年の修理に解体されて、押縁は洋釘止めとなっていた。小屋組は中央に土居・四天束・上桢で台を組み、隅と中央の八本の登梁を架け、これに母屋三通りを打ち、木瓦を葺いている。昭和六年の修理の際は小屋組を組み直していたが、これが建立後はじめての解体であった。内屋根は長い割板を用いているが母屋で受け、垂木は用いていない。<sup>5)</sup>

室生寺弥勒堂は平安時代末頃の建立と考えられるが、永正年間に屋根・小屋組の修理があった。唐招提寺所蔵の「伝法灌頂作法」は室生寺の乾元二年（一一三〇三）と文保元年（一一二七）の灌頂作法を記したもので、文保元年には現灌頂堂が完成していたが、乾元二年には金堂（薬師堂）と弥勒堂を使用していた。同書は室町時代に再三の書写を経ているが、弥勒堂は南側を正面とし（現在東正面）、「其後弥勒堂被修理之刻被成東向畢」と記されており、もと妻入りで正面一間は広縁であったらしいが、軸部・軒廻り材は近世材に替っている。<sup>6)</sup>

小屋組内部に南北方向の内屋根があり、入側桁に束を立てて旧又首台を支え、その両端の母屋と棟木の間に疎垂木を配し、棟木側面に垂木先を杓差しに納め、小舞裏に厚さ一・五cmの杉割板を縦に張り重ねている。建立当時は入母屋造・妻入り、前面に広縁が付き、内屋根の

棟木が化粧棟木であった。当初は内屋根と云うよりも、むしろ小屋組の主体であったと考えられよう。<sup>7)</sup>

当麻寺本堂（曼荼羅堂）は永暦二年（一一六一）の内陣を一体に納めた奥行深い仏堂であるが、内陣は前身堂の二重虹梁幕股を寄棟造風に残したのに対し、外陣にも大虹梁を架け、上に内屋根を造り、側面入側柱通りの地垂木尻上に置いた妻梁と大虹梁中央に束を立て、棟木を受け、内外陣棟木上にさらに大梁をのせて大屋根を受けている。内外陣境では内陣大虹梁鼻に中央を一段上げ、上端を溝状に決った極木を入れ、外陣側は地垂木尻に土居桁を置いて棟木と西側極木・東側土居桁の間を疎垂木小舞裏とし、薄割板葺とする。垂木は下端に胴付を残して上方は棟木側面に大入れに納め、前面（東側）下方は土居桁上端に前面に畦を残して斜の彫込みを作り、垂木を引掛けている。西側では中央部は極木側面に大入れ、両脇では角に浅く欠込むか、上端にのせて垂木間に面戸を入れる。垂木上を小舞裏とし、厚さ一分ほどの檜割板をほゞ五枚重ねに押縁で押え、板自体はとめていないが、板のかんりの部分は後世の修理（恐らく建物を起した室町の大修理）に取り外されていた。内陣の二重虹梁幕股・垂木は前身堂以来のものであるが、永暦に化粧裏板縦張りとし、一部その上にへぎ板が残っていたので、もとは内陣西側に裏板上にへぎ板を三枚重ね程度にして葺き、東側は板の割目等に部分的にへぎ板を葺き、さらに後にへぎ板の大部分を撤去し、多数の板光背・板絵を張り重ねていた。



第三図 当麻寺曼荼羅堂発見某建物棟木

曼荼羅堂転用古材の中に長さ九尺、丈四寸五分、口脇丈四寸二分、幅三寸五分で上端に緩い背峯があり、仁安三年（一一六八）の墨書を持つ棟木古材があった。小堂の棟木であるが、側面に一・七三尺割りの垂木納穴5カ所、下端に肘木太納穴一カ所あり、梁上に合掌を組んで肘木をのせて棟木を受け、垂木は桁に引掛りを作っていた可能性が大きい。<sup>8)</sup>

東大寺法華堂入側桁のように、桁上端後寄りに欠込みを作り、こゝに垂木（合掌）尻を納めたと考えられる遺構は大神神社撰社大直祢子神社本殿（もと大御輪寺本堂）内陣部平安後期改修時の入側桁にも見られる。<sup>9)</sup>

滋賀県長寿寺本堂は平安末乃至鎌倉初頭頃の桁行五間、梁間五間、内外陣を一つ屋根に葺いた仏堂で、小屋組には明治修理の後補材がかなりあるが、古材が比較的保存されている。転用古材の中に側面に垂木の太入れ仕口があって、釘を用いない材があり、当麻寺外陣と同様の工法である。このような棟木に垂木を納差しとする工法は、京都府大報恩寺本堂、滋賀県円光寺本堂、兵庫県大國寺本堂でも発見されている。

大報恩寺本堂は安貞二年（一二二八）の建立、応仁の乱を免れた市街地唯一の遺構である、発見古材の中に棟木三丁が指棟木・登梁に転用され、切られていたが全長を残し、継手には野肘木があり、側面に野垂木大入れ枘穴、垂木下方一部胴付となり、上端に緩かな背峯がある。垂木割は蟻羽は繁垂木であるが、小屋内は二・二尺強、野垂木に小舞を打つ縦板葺で、大規模の内屋根であったと思われるが、下方小屋組は復原資料が得られなかった。<sup>10)</sup>

奈良県長弓寺本堂は弘安二年（一二七九）の棟木銘があり、西大寺叡尊の「感身学生記」によると同五年に堂塔供養が行われた。内陣と外陣大部分にかけて、身舎桁行三間（両妻飾間）に内屋根がある。修理前実測図によると、大梁の後端に母屋を架け、前端は束を立て、母屋を受け、中央は二重梁束立て、小屋貫を通し、柱間を三つ割に垂木を棟木の上へのせ、小舞裏、縦板張りとする。第一室戸台風災害を期に昭和九・一〇年度に解体修理が行われ、この時小屋組全体を新材で組替えているが、関口欣也氏は、「里村心城師によれば小屋裏内の二重屋根の材は割板で、垂木を除く材は廃材もほとんど松であった由である」と述べられ、内屋根（二重屋根）を当堂最大の特徴とされ、平安末における野屋根の発生を前提として、屋根の修理が困難に陥った場合にも内陣もしくは身舎だけでも雨をもらさぬ配慮と見られている。本堂の内屋根は内陣・外陣を広く覆う大規模のもので、大報恩寺本堂で復原されたものと同類のものである。<sup>11)</sup>

滋賀県円光寺本堂は旧棟木銘・柱銘によって康元二年（一二五六）上棟であるが、元禄一七年（一七三二）に大修理があつて屋根を入母屋造・瓦葺に改めていたが、建立当初は切妻造であつたことが明らかとなつて復原されている。棟木には垂木を枘差しとし、上方大入れ、下方は胴付となるが、棟木自身は束で支えられる。<sup>12)</sup>

兵庫県大國寺本堂の建立年代は明らかでないが、形式上室町時代初期を降らないと考えられ、安置の五軀の仏像は藤原時代の作である。後に安永三年（一七七四）に解体修理があり、全体に改修され、向拝が付けられたが、本堂には平安時代後期と認められる前身建物の古材があり、その中に棟木を切断して足固貫に転用されていたものがあつた。棟木は幅四寸三分、丈四寸五分で上端に五寸勾配の背峯が付き、両側面に垂木枘穴、下端に小屋束の丸枘穴と妻飾の舟肘木の太枘を残し、身舎入側桁では上端に欠込んで釘止め、棟木では釘止めなく、垂木割は柱間八尺三つ割、屋根は木瓦葺であつた。<sup>13)</sup>

平安時代以後も、内屋根や小屋組が疎垂木小舞裏、割板葺かあるいはそのように推定される例が少なくない。これは又首（垂木）を桁に引掛け、その拌みに棟木をかぶせ、又首上に小舞を打つて割板葺とした奈良時代の板屋の系統を引くものと考えられる。古くは柱位置のみ又首（垂木）を配したものが、柱間を疎垂木に教支に割付け、小舞を打つて割板あるいは厚目の流し板葺とするようになった。特にその多くは棟木側面に垂木を枘差しとし、桁では前角を残して上端を斜に

彫り込み、垂木には溝をほって桁前角に引掛けたものが少くない。

疎垂木の場合、本瓦葺とするのは重量的にも無理があり、手法としても一致せず、檜皮葺の古い技法でも疎垂木より繁垂木の方が適当と考えられるので、疎垂木小舞裏は本来板葺に対応する手法であつたと考えられる。

#### 四、疎垂木と庇

春日大社本殿では身舎は繁垂木となるが、向拝は疎垂木小舞裏である。現在は向拝も檜皮葺で身舎の端で巧みに檜皮を葺廻しているが、向拝は疎垂木であり、原初は身舎は茅葺、向拝は板葺であつたのではなからうか。身舎は方一間、床が高く切妻造、妻入りで、銅鐸や土器の刻画の多くが、高床、切妻造、妻入りで妻の方に梯子が表現されているのと類似している。この梯子の上に庇が付けば春日造の社殿となる。春日造社殿の源流は茅葺の穀倉（神宝の宝庫とも考えられる）の妻の梯子を板庇で覆つたものではなからうか。神社建築の源流を高床の倉庫とみることはすでに一般的見解であるが、神宮の荒祭宮正殿がかつて板倉造であつたのと同じ状況にならう。身舎が繁垂木で向拝を疎垂木とすることは、流造の加茂神社でも同様で、中世には身舎と庇の破風の継目下端に小さな段が、あつたらしい。<sup>14</sup>

法隆寺聖霊院は弘安七年（一二八四）に改築され、前面に一間の広

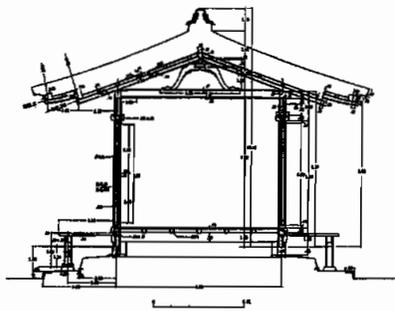
庇と向拝が設けられている。現在広庇は疎垂木小舞裏、檜皮葺であるが、聖霊院は保安二年（一〇二二）に東室の南端三房を堂殿に改めて太子及び侍者像を安置したもので、弘安以前の聖霊院については、法隆寺本「古今目録抄」に、

東室ハ九房ナリ、一房ニ二間宛ナリ、小子房モ又九房也、此モ二間ヲ為ス一房ト、但シ大房ノ南三房ヲ新クメテ為ス聖霊院ト、

有妻庇<sup>ヒサシ</sup> 木瓦葺<sup>キツキ</sup> 有階隠<sup>ハシカクシ</sup> 在高藍、曇者ハ簀子敷也、（以下略）

と見えて、現在同様に広縁があり、木瓦葺であつたことが知られるが、解体修理の際に前身建物の転用古材のなかで、広庇部材としては、柱断片、木瓦流し板、同瓦棒、方立断片などが発見されており、前身建物の広庇の柱は大面取角柱、舟肘木にも面をとり、垂木割は桁及び主屋側入側繫梁上の釘痕により柱間を三つ割とし、疎垂木小舞裏、木瓦葺であつたことが確認されている。<sup>15</sup>

疎垂木小舞裏の手法は中世にも実例が少くない。石上神宮撰社出雲健雄神社拝殿は永久寺から移建された割拝殿で、現状のように唐破風の付いた馬道が設けられたのは「内山永久寺置文」



第四図 石上神宮撰社出雲健雄神社拝殿断面図（日本建築史基礎史料集成）

に云う正安二年(一二三〇)と考えられるが、身舎は虹梁にや、繊細な両脚を開いた幕股をのせ、斗・肘木で棟木を受けている。幕股は脚元の繰形や脚内彫刻欠損痕の状況からかつて黒田鼻義氏が指摘されたように、や、差のある三種に分れるようで、当初桁行三間、次に五間に増築され、さらに現状のように改造されたものと考えられ、これについては別に論じたことがある。

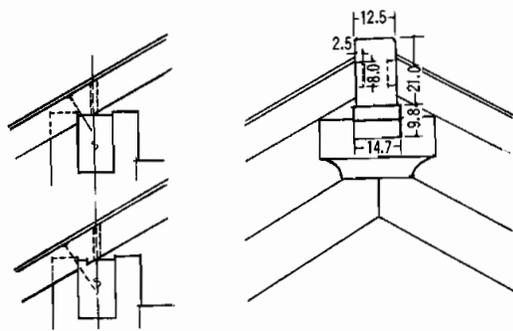
棟木は下端に面をとり、肘木・斗とともに古材が残り、垂木は坪みで下半が互いに胴付となり、上半は棟木に納差しとなること当麻寺曼荼羅堂閻伽棚と同様で、側桁との仕口の有無は明らかでない。この拝殿のように板幕股や合掌でなく、両脚を開く幕股で棟木を支える手法は極めて珍しい。創立年次は鎌倉時代の初頭頃に考えられるが、中尊寺金色堂以来、間斗束の代りに幕股を用いるようになった手法を早速合掌の代りに取入れたのであろう。<sup>16)</sup>

幕股は平安後期に出現した建築技法の中でも特徴的なもので中世以後広く用いられるが、古代以降組物の中備は間斗束であった。当麻寺本堂や興福寺北円堂では組物を先に組み、荷重が加わってから間斗束を送り込んでいた。頭貫に対する荷重を少しでも少なくする工夫であろう。間斗束よりも両脚を開いた幕股を用いれば、頭貫に対する影響ははるかに少ないであろう。本論には直接関係ないが、幕股を中備に用いたのは意匠とともに頭貫に対する荷重の軽減が主な目的で、むしろ大規模建築にふさわしく、その出現は六勝寺あたり

ではないだろうか。

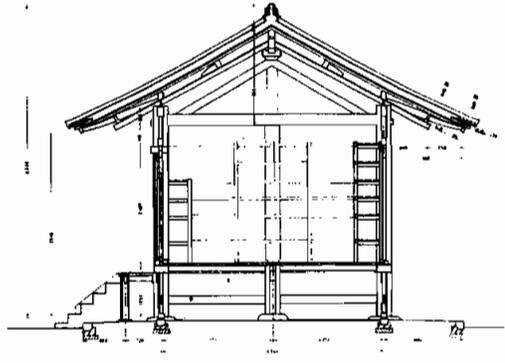
### 五、中世の疎垂木構造

般若寺経蔵の前身建物はもと土間で、正面及び側面が開放の簡素な鎌倉時代中期頃の般若寺復興期の遺構と認められる。鎌倉末か室町初期に現状のような高床造の経蔵に改造され、その後江戸時代末頃にかの修理が行われている。建物の構造は独特のもので組物はなく、桁を柱天に頭貫のように納め、梁は柱天よりや、下って両面柱に納差



第五図 般若寺経蔵垂木仕口

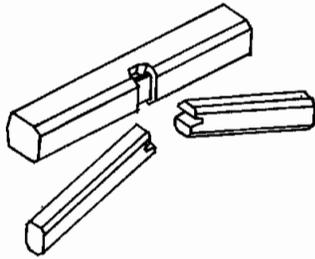
し、妻は又首組、斗・肘木、内部梁上は合掌、斗・肘木で棟木を受けている。軒は疎垂木、柱間を六支に割り、棟木に大入れ、下方は垂木を棟木に胴付とし、下端に桁との入り止めの欠込みのある垂木が五四本中一五本あり、桁への止め方は二種あり、一つは桁外角には欠込みを作らず、垂木下端を山型に削り込んだものが六丁、他は桁上端の前角



第六図 般若寺經藏断面図  
(修理工事報告書)

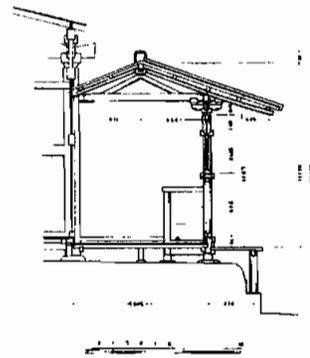
れる。<sup>(17)</sup>

当麻寺曼荼羅堂閼伽棚は桁行三間の一棟の独立した建物と見られる本格的なもので、角柱大面取の柱下に土台を入れ、頭貫、出三斗、中備簀股、疎垂木小舞裏、本堂とは繫虹梁を入れ、妻飾は繫虹梁上に板簀股、内部柱通りでは繫虹梁上に合掌を組み、斗・実肘木で棟木を受ける。垂木は柱心に打ち、各間五つ割とし、棟で両側の垂木



第七図 当麻寺曼荼羅堂閼伽棚  
垂木と棟木の仕口

三 cm 程を残して斜の欠込みを作り、垂木にはこれに引掛ける溝をほったものが九丁残っていたが、桁上面前角を改築の際に垂木勾配に削ったために、背面桁で一部欠込み痕を残していた。その配置は明らかでなかったが、一つか二つ置きに引掛りを作っていたと思わ

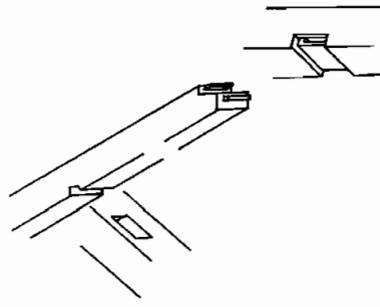


第八図 当麻寺曼荼羅堂閼伽棚  
断面図 (修理工事報告書)

下方が胴付きとなり、上方は棟木に納差しとしているが、棟木と西側桁で釘止めとし、東側は繫虹梁端の身舎柱際に垂木掛を入れている。破風に全部当初材が残ることは珍しく、南妻の懸魚も古い、屋根が木瓦葺であったため、破風上に三カ月形の矧木を付ける。南妻東方は本堂内法長押に取付くため短く、破風上面戸を作り出していた。他の破風上の面戸も当初材で、広小舞の古材があり、垂木上を小舞裏としているが、修理前は本瓦葺であった。南妻東方破風上の厚板は厚さ二寸七分の檜の木瓦板で、一回打替えているが、旧釘痕もよく合致し、破風と同じ当初材で、拌みに径約四寸ほどの拌み丸瓦棒の仕口があり、明らかに木瓦板と認められるものであった。棟木は細い材であるが、垂木の拌みで棟木中間を支えたことは、構造上かなり有効な役割を分担していた。棟も棟積様箱棟であった。<sup>(18)</sup>

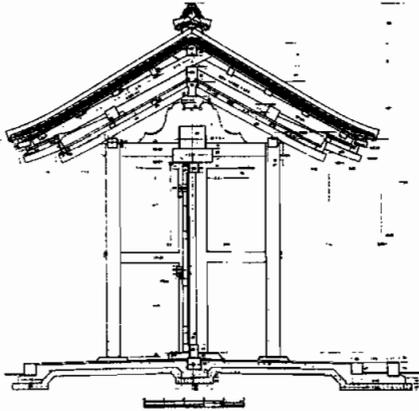
東福寺六波羅門は鎌倉初期と考えられる本瓦葺の棟門で、室町時代に解体修理があり、転用材の控柱を男梁下に立て、現状は四脚門となっている。疎垂木小舞裏で、垂木は柱心に打ち、柱間六つ割とし、蟻羽には破風まで垂木がない。垂木は前後の垂木の拌み下半胴付き横枓差しとし、垂木上半は棟木側面に大入れ横枓差とする。軒桁上端には

地垂木の引掛りを作り、垂木が動かないようになっていゝ。両妻は親柱に女梁・男梁を落とし込み、板幕股を挟み、斗・肘木で棟木を受け、男梁先端に軒桁を架け、柱間中央にも天秤状に軒桁受けを出す。<sup>19)</sup>



第九図 東福寺六波羅門垂木と桁・棟木の仕口

教王護国寺灌頂院北門も親柱に男梁・女梁を落とし込み、先端に軒桁を架け、男梁上の板幕股を柱で挟み、肘木は軒外の部分を棟木から作り出している。灌頂院の建久年間修理または建長再建時に建立されたと考えられ、

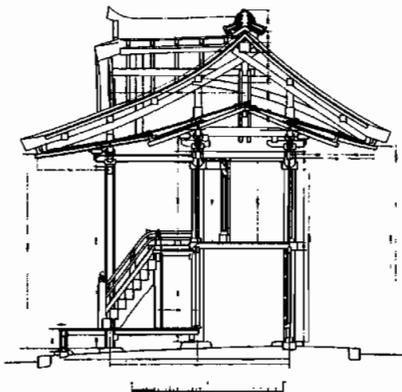


第一〇図 教王護国寺灌頂院北門断面図 (修理工事報告書)

現在本瓦葺であるが、創建時は軽い葺材(恐らく木瓦葺)であろう。地垂木の当初材は軒桁の上端外角に斜のほり込みを作って垂木を引掛け、棟木側面に地垂木尻を大入れとするために棟木下端から六分上りに巾三寸、丈四寸一分、深さ八分程の納穴をほり、垂木上に小舞を配する。親柱々頭の納まりは棟門式であるが、控柱は面取角柱で古く、柱頭で男梁を挟んで受けており、棟門風の門である。

同寺灌頂院東門は四脚門、繁垂木で妻は頭貫上の大斗で妻虹梁を受け、板幕股をのせており、垂木は棟木上にのる一般的四脚門で、北門より一段丁寧に作られている。<sup>20)</sup>

奈良県添御県坐神社本殿は五間社流造の正面三カ所に千鳥破風を設け、端から第二間を相の間とし、春日造三殿を並列した形式の連接社殿で、永徳三年(一一三三)の墨書が発見されて建立年代が明らかとなった。この本殿では化粧裏板は杉の割材、幅七・五乃至八・五cm、厚さ七mm乃至一cmを釘打ちとし、その上に幅八・五乃至一一・五cm、厚さ五mm乃至一cm、長さ一・六三mの杉割板を木口突付きで一乃至三・五cm羽重



第一一図 添御県坐神社本殿断面図 (修理工事報告書)

ねの横板張りとし、杉割板は胴縁を釘止めで押えていた。さらに地垂木上に胴縁を二通り打ち、その上に幅九〇―一二cm、厚さ五〇―九cm、長さ一・六三―一・六六mの杉の割板を積み重ねて正面を通して二枚重ねとして、押縁三方所止めとしていた。背面も同様であったが、寛文五年（一六六五）修理の時に背面飛檐垂木上の割板を切断していた。もとは正面同様茅負まで延し、入念な仕事をしていた。<sup>21)</sup>

古代末から中世に、中尊寺金色堂、当麻寺曼荼羅堂、室生寺弥勒堂の内屋根のように、薄く長い割板を疎垂木小舞裏に用いたものが少なくなかったであろう。

#### 六、割板葺の野地構造

中世、特に岡山・広島県下の遺構に野地に割板を用いたものが少ない。康永四年（一三四五）の広島県浄土寺阿弥陀堂では、野垂木の上に一尺内外の割りに小舞を打ち、野地板は長さ四・四乃至一〇・八尺、厚さ一分内外、幅三寸位の薄い檜割板を葺足は一定せずに二枚重ねの縦葺とし、野小舞の位置で押縁を打ち、これで屋根の土留棧を兼ねていた。このような割板を使うことによって小屋組内と外気が流通し、小屋組は常に乾燥状況にあり、腐朽防止に大きい役割を果たしたと報告されている。<sup>22)</sup>

嘉暦二年（一三二七）の浄土寺本堂も野垂木の上に小舞を打ち、阿

弥陀堂と同様の割板を二枚重ねに縦板張りとしていた。長さが一定でないため、葺足はまちまちであったが、小舞通りで押縁止めとしていた。<sup>23)</sup>

同じ広島県尾道市の西郷寺本堂は文和二年（一八五三）建立と伝えるが、未完成で年数を経過したと思われるもので、応永頃の完成と考えられているが、時宗本堂最古の遺構である。野地は長さ平均二・四m、幅約八cm、厚さ八mmの杉割材ののね板を流れの重なり平均三〇cm横は羽重ねまたは突付とし、更に一枚重ねて重なる位置を押縁で止めており、その間約四〇cmの間隔で千鳥に長さ二〇cm、径一・二cmの丸楔型木を打って土留めとしていた。これは他に例のない珍しい手法である。

同市西国寺金堂は至徳三年（一三八六）地鎮を行っているが、完成は永享頃までか、ついているらしい。修理前の野地は永享二年（一七三三）の松板であったが、正背面上部付近に杉ののね板が残り、当初この堂も割板野地であったらしい。水線のある押縁が発見されており、建立時割板野地を仮屋根の状況にしていた時期があったと考えられている。<sup>24)</sup>

岡山県牛窓町の本蓮寺本堂は明応元々七年（一四九二―九八）に建立された方五間、寄棟造、本瓦葺の仏堂で、建立以来一度も解体された形跡を認めず、保存が極めて良く、当時の屋根葺手法まで明らかにされた。野地板は幅二寸六分乃至二寸九分、厚さ一分五厘の杉板目割

板を二枚重ねとして横張りとしていた。板長さの継手に押縁を打ち、その他は一・八尺乃至二尺ごとに押縁止めとしていた。妻棟際の勾配急なところは野地板を逆羽重ね張りとしていた。平・妻とも棟から約二〇尺の間は登り二・五尺間に丈一寸、幅八分五厘のちよな加工の松土留木を打ち、野地板の止めと葺土の止り止めとしていた。<sup>26)</sup>

割板の用法の一つに網代がある。承元四年(一一二〇)建立の奈良興福寺北円堂では垂木上を網代組として垂木間を白漆喰塗としている。地垂木上は幅三・五乃至五・五cm、飛檐垂木上は三・四乃至三・五cm、檜杉の板目割、二枚ごとに上下を通して編み、上に押え板、板目割、幅一二乃至一六cm、厚さ二mm、長さ約三m、継手は重ね継とし、地垂木上は径八mmの細縄で編み、飛檐では羽重ねにただけで、押え板の上から地垂木と一の飛檐では三支ごと、二の飛檐では二支ごとに杉割材、幅四・五cm、長さ一・五乃至二mを釘打ちで押えている。<sup>27)</sup>

奈良県喜光寺本堂にも一部網代組下地が残り、解体修理の際に身舎・裳階とも化粧裏板胡粉塗を網代組漆喰塗に復原している。<sup>28)</sup> このような手法は新薬師寺本堂半解体修理でも確認されており、本堂の中世大修理の際に垂木上を網代組下地としたことが明らかとなっている。同寺南門も化粧垂木上を網代下地としていた。古代末から中世にかけてかなり用いられた手法であろう。

## 七、結 語

藤原豊成殿・法備国師の三丈殿で推定され、平城京東堀河で発見された桁材から裏付けられた合掌構造はいずれも板葺と推定され、この板も豊成殿・三丈殿では長尺板の恐らく割板であったと推定される。

このような合掌構造は疎垂木小舞裏に引継がれ、小屋組内部の内屋根の屋根板には薄い割板が用いられた。とくに桁では上端前角に畦を残して斜めの欠込みを作り、垂木に溝を彫ってこれに引掛けて止め、棟木では側面に垂木の上方を大入れ納差しとし、下方は胴付として棟木を支える手法が、構造簡素な建物や棟門に用いられた。もともと古代末乃至中世初頭には梁上に合掌か束、あるいは簀股の脚を踏張って棟木を受け、中間の垂木は補助的な働きとなった。棟門でも両妻では親柱天に挟まれた板簀股で棟木を受け、中間は垂木で棟木を支承した。一般には垂木は棟木上端に打たれ、逆に棟木によって受けられるのであるが、上記のような構造では垂木で棟木を下端または側面から支える役割りをもはたしている。

屋根板には比較的薄く長い板が用いられたが、薄い割板で曲物や網代を作る手法は古墳時代から行われていたらしい。絵巻物に見える古代末乃至鎌倉初期の民家の屋根板も割板が多く用いられ、屋根の流れを二段葺程度、流れの長い時は中間でや、勾配をかえて葺き、上から

押えをのせている。寺院建築の門なども板葺が少なからず見られる。当時、これが寺院の付属的建物や民家に用いられた一般的手法であつたらう。

疎垂木はその後も広く行われ、屋根は板葺か檜皮葺・こけら葺とし、本瓦葺とはしなかつたと考えられる。疎垂木は豊成殿などの合掌構造に源流があり、茅葺のほかは割板葺が民家特に町屋等の一般的手法であつた。柱心のみに合掌を入れる手法から、柱間をいくつかに割つて疎垂木となつても、桁に引掛けを作つたり、垂木先端で棟木を側面から下端から支え、棟荷重の若干を負担しようとした。特に棟門においてこの手法が広く用いられたと考えられる。

垂木の割付けには繁垂木・疎垂木のほか、繁垂木六本の中間二本を抜いて吹寄垂木としたり、あるいはさらに垂木を減じて、山口県洞春寺観音堂の身舎のような大疎垂木、同観音堂裳階、岐阜県永保寺観音堂の身舎・裳階、法隆寺福園院本堂、十輪院本堂裳階、同寺表門のように垂木を用いない板軒のものもある。

野地は横板張りとするのが一般的であるが、その他、薄割板とするもののほか、割木舞・割竹を編付けたもの、弘安六年（一二八三）の靈山寺本堂、当麻寺曼荼羅堂の康永四年（一二四五）修理時、応永二年（一四一五）の興福寺東金堂のような縦板段葺（流し板葺）とするものがある。文明二二年（一四八〇）頃から天文一六年（一五四七）頃までの長期を要して完成した和歌山県根来寺多宝塔では、下層は杉

赤身柱目板、長さ二・三尺、幅三寸五分、厚さ三分の板を一寸三分ずつ後退させて三枚重ねとしたものを、葺足をはじめ五寸、次から一・四尺に竹釘止めとし、押縁には水抜きの穴をあけ、瓦が葺かれるまで直接雨を受けていた。上層では小舞上に長さ七・二尺、幅一尺内外、厚さ八・九分の檜板を九寸足に二枚重ねとして六・七尺足に葺き、上板の傍に目板をかぶせるなど、<sup>(30)</sup>多様な野地の手法があるが、木瓦葺をふくめて今回はふれていない。とくに板軒・木瓦葺については別稿に述べたいと考えている。

本稿では疎垂木の源流を奈良時代の板屋と推定し、その屋根に用いられたと考えられる割板が、古代末以降も建物の内屋根や野地に、あるいは網代に用いられたことを述べた。

併せて、石上神宮撰社出雲健雄神社拜殿では、虹梁上を合掌とせず、脚の開いた蓐股を使用するが、中備えの蓐股の意匠になつたもので、化粧蓐股（本蓐股）の発生は、間斗束から頭貫に荷重がか、つて中垂みとならないよう両脚を開く蓐股が考え出され、平安時代後期以来、中備えに用いられるようになったと考える私見をも述べた。

#### 注

(1) 岡田英男「古代建築の上部構造」『文化財学報』第一集 奈良大  
学文学部文化財学科 平成五年

(2) 福山敏男「奈良時代における石山寺の造営」『宝雲』第五・七・

十・十二冊昭和八〜一〇年、『日本建築史の研究』桑名文皇堂

昭和一八年 綜芸社 昭和五五年

関野 克「在信楽藤原豊成板殿考」『宝雲』第二十冊 昭和一二二年

- (3) 【国宝東大寺法華堂修理工事報告書】奈良県教育委員会 昭和四七年

- (4) 【国宝石山寺本堂修理工事報告書】滋賀県教育委員会 昭和三六年

- (5) 【国宝中尊寺金色堂保存修理工事報告書】国宝中尊寺金色堂保存修理委員会 昭和四三年

- (6) 田中 稔「唐招提寺所蔵「一字結縁法華経」・「伝法灌頂作法」について」『奈良国立文化財研究所年報』 1963

- (7) 鈴木嘉吉「弥勒堂」『大和古寺大観』第六巻 室生寺 岩波書店 昭和五一年

岡田英男「室生寺弥勒堂」『室生寺初塔の研究』中央公論美術出版 昭和五一年

- 【重要文化財室生寺弥勒堂修理工事報告書】奈良県教育委員会 昭和五九年

- (8) 【国宝当麻寺本堂修理工事報告書】奈良県教育委員会 昭和三五年

- (9) 【重要文化財大神神社摂社大直祓子神社本殿修理工事報告書】奈良県教育委員会 平成元年

- (10) 【国宝大報恩寺本堂修理工事報告書】京都府教育庁 昭和二九年

(11) 関口欣也「長弓寺本堂」『日本建築史基礎資料集成』七 仏堂

IV 中央公論美術出版 昭和五〇年

奈良県教育委員会事務局文化財保存課今西良男氏の示教によると、長弓寺本堂は妻飾を除き、小屋組はすべて新材に取替えられている。なお奈良県霊山寺本堂は弘安六年（一二八三）の建立の純和風に近い建築であるが、ここでは、小屋組内に水平の内天井が張られている。

また、唐招提寺金堂では内陣天井上に内屋根があるが、後補と考えられ、中世乃至近世の修理の際に設けられたものであろう。

- (12) 【重要文化財円光寺本堂修理工事報告書】滋賀県教育委員会 昭和三四年

- (13) 【重要文化財大國寺本堂修理工事報告書】重要文化財大國寺本堂保存修理委員会 昭和四一年

- (14) 谷 重雄「上賀茂神社嘉元造替の本殿」『建築史』第二巻第四号 昭和一五年

- (15) 【国宝法隆寺聖霊院修理工事報告】法隆寺国宝保存工事報告書 第十二冊 法隆寺国宝保存委員会 昭和三〇年

- (16) 岡田英男「石上神宮摂社出雲健雄神社拜殿」『調査研究報告書 内山永久寺置文 研究篇』東京国立博物館 平成六年

- (17) 【重要文化財般若寺経蔵修理工事報告書】奈良県教育委員会 昭和四八年

(18) 注八に同じ。

(19) 『重要文化財東福寺六波羅門並びに東司修理工事報告書』 京都府教育庁 昭和五三年

(20) 『重要文化財教王護国寺准頂院并北門東門修理工事報告書』 京都府教育庁 昭和三四年

(21) 『重要文化財添御県坐神社本殿修理工事報告書』 奈良県教育委員 会 昭和四一年

(22) 『重要文化財浄土寺阿弥陀堂・露滴庵及び中門修理工事報告書』 重要文化財浄土寺阿弥陀堂・露滴庵修理委員会 昭和四五年

(23) 『国宝並びに重要文化財浄土寺本堂・多宝塔・山門修理工事報告書』 国宝浄土寺修理委員会 昭和四八年

(24) 『重要文化財西郷寺本堂および山門修理工事報告書』 重要文化財西郷寺本堂および山門修理委員会 昭和四〇年

(25) 『重要文化財西国寺金堂・三重塔修理工事報告書』 重要文化財西国寺金堂・三重塔修理委員会 昭和四二年

(26) 『重要文化財本蓮寺本堂修理工事報告書』 重要文化財本蓮寺修理委員会 昭和三三年

(27) 『重要文化財興福寺大湯屋・国宝北円堂修理工事報告書』 奈良県教育委員会 昭和四〇年

(28) 『喜光寺本堂修理一件』 奈良県立奈良図書館蔵

(29) 奈良県教育委員会奈良県文化財保存事務所の示教による。

(30) 『国宝大伝法院多宝塔修理工事報告書』 国宝大伝法院多宝塔修理委員部出張所 昭和一五年

### 補記

中世の内屋根工法の一例として、法隆寺山内の宝珠院本堂がある。永正九年（一五二二）政南院持仏堂として建てられ、文化二三年（一八一六）に移築された。昭和四五、四六年度の解体修理の際、旧棟木が発見された。この棟木は両端を束で支えるのみで、中間は棟木側面に垂木納穴が七カ所あり、側柱通りの母屋からここに垂木を架け、棟木側面を支えて内屋根を構成していたものと想定されて復原された。棟木上にはさらに束を立てて野棟木を通して野垂木を入れている。室町時代にも内屋根の工法が用いられたことを示す珍しい実例と云えよう。